

教育課題研究

今と将来をよりよく生きる子どもの育成を目指す教育の在り方
～子どもの学びを確かにするカリキュラム・マネジメントの検討～

研究のまとめ

2024年3月

宮崎県立みやざき中央支援学校

目次

ページ

はじめに 学校長より

I 今年度の研究について 1

II 研究の実際

1 校内研究について 7

2 校内研修について 17

III 研究のまとめ 23

巻末資料 ①「12年間の学びの配列表」

はじめに

今年度の校内研究は、みやざき中央支援学校ならではの教育実践を目指して、2年間の計画で「今と将来をよりよく生きる子どもの育成を目指す教育の在り方」を主題として取り組みました。

新学習指導要領は2017年の改訂後、順次実施されており、「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメント」が求められています。学習指導要領に示された時代のニーズに応じた育成すべき資質・能力、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」をバランスよく育む教育課程であること、また、どの学部学年、どの発達の段階、どの実態の子供たちが何を学ぶのかが、根拠をもって年間指導計画に示されていることも重要になります。もちろん、小学部から高等部まで系統性や一貫性のある教育計画であることも必要です。そして指導計画を基に授業実践を行い、評価、見直しを行い子どもの学びを確かにする本校ならではの教育課程の編成、つまりカリキュラム・マネジメントに取り組んでいくことが求められます。

このため、今年度の研究では、「学習指導要領に対応した年間指導計画の整理や検討」、「知的障がい教育の専門性向上を目指した研修の充実」の2本の柱を立て全職員で取り組むこととしました。

「年間指導計画の整理や検討」においては、8つの研究班に分かれ、小学部から高等部までの12年間の学びの配列表を作成しました。その中で、各学部の学びのつながりや系統性を確認するとともに見直す必要がある点についても検討することができました。特に全学部が縦割りになり各学部や各教科等の課題について協議し、新たな年間指導計画の作成が必要であるとの認識が共有でき、次年度の研究の基礎を固めることができました。

「知的障がい教育の専門性向上を目指した研修の充実」においては、教育課程や教育活動の見直しに必要な基礎的・基本的な研修を全体研修やニーズ研修、個別研修など複層的に実施し、それぞれの職員の専門性向上を図ることができました。

寄宿舎においては、「ルーティーンワークの効率化と寄宿舎の魅力発信」をテーマに、寄宿舎業務の見直しや改善、寄宿舎の理解啓発を図る実践研究に取り組みました。記録資料の電子化を効果的に進めることで働き方改革も図られ、ホームページを効率的に活用した発信をすることで寄宿舎での生活や活動、どのような力が育まれているか等、関係者だけでなく広く一般の方々にタイムリーな啓発を行うことができました。

本校職員が課題意識を高く掲げ、解決に向けてチームみや央で取り組んだ今年度の研究の成果を御高覧いただければ幸いです。研究は2年目へと続き、今年度の成果と課題を土台として、さらに充実した実践研究に発展できることと期待しています。

結びに、本研究に御尽力いただいた皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和6年3月

宮崎県立みやざき中央支援学校
校長 松田 律子

I 今年度の研究について

1 研究主題

「今と将来をよりよく生きる子どもの育成を目指す教育の在り方

～子どもの学びを確実にするカリキュラム・マネジメントの検討～」（1 年次／2 年）

2 主題設定の理由

学習指導要領が改訂され、2020 年度の小学部における全面実施を皮切りに、2021 年度は中学部、そして高等部においては 2022 年度入学生から順次実施されることは、周知のとおりである。

本校は昨年度まで、「豊かに生きる児童生徒の育成を目指す新たな学びに対応する教育の在り方～新学習指導要領を踏まえた授業づくりをとおして～」を研究主題として、「現行の学習指導要領に基づいた教育内容の充実」、「新たな学びに対する教育の在り方」、「ICT 機器を活用した学習活動の充実」の三つの課題について取り組みを行ってきた。その結果、ICT 機器の活用について学校としての基礎作りができ、新たな学びに対する教育についても外部人災の活用など様々な検討が行われ、一定の成果が見られた。一方で、現行学習指導要領に基づいた教育活動の充実という面においては、本校の教育活動の基盤となる年間指導計画について、カリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた際、その内容や活用について検討が不十分であり、課題が残る内容となった。

管理職や教務主任、小学部・中学部・高等部の各学部主事との話し合いの中では、「学習指導要領に十分に対応した教育課程になっているかについて検討が不十分であり、年間指導計画や学習評価など、改善や見直しをしていく必要である」、「知的障がいのある児童生徒の教育についてあまり経験が無かったり、初めて担当したりする職員の割合が多くなり、知的障がいのある児童生徒の指導や特別支援学校の学習指導要領などについてより十分に理解する必要性がある」の、2 点が本校の喫緊の課題として挙げてきた。

そこで、今年度は、上記の研究主題を設定し、以下の 2 点について研究を行うこととした。

- ① 学習指導要領に対応した年間指導計画の整理や検討を行う。
- ② 職員全体に向け、現行の学習指導要領の理解や知的障がいのある児童生徒の指導について基本研修を計画する。（教育研修センターの新研修制度・NISE 学びラボ・OJT を活かした本校の職員による研修などを活用した専門性を維持・向上するための研修計画の体系化、組織化）

3 研究計画

本研究については、年間指導計画の整理や検討を行うため、2 カ年の研究とした。1 年目（令和 5 年度）は、年間指導計画について、本校で指導している学習内容を現行の学習指導要領の観点に基づいて整理・見直しをし、今後、本校で活用するための年間指導計画の試案を検討・作成することとした。2 年目（令和 6 年度）については、整理を行った年間指導計画を作成・完成することとした。表 1 に今年度の研究計画を示した。今年度は、年間指導計画整理を行うので、学習指導要領についての基礎的、基本的な内容の研修を計画し、職員が共通理解のもと年間指導計画の検討ができるようにした。職員に向けた基本研修については、全体研修（4 回）、ニーズ研修（5 回）、NISE 学びラボ^注（4 回）、研究通信（8 回）、相互授業参観（1 人 1 回以上）の 5 つの取組について実施した。

表1 令和5年度 みやざき中央支援学校 研究計画

回	日付	時間 (分)	内容	
			全校職員	研究担当者等
1	4月6日(木)	50		第1回 研究推進委員会
2	4月21日(金)	50		全体研修1 「特別支援学校の学習指導要領の改訂のポイント」 講師：校長 松田律子先生
3	5月9日(火)	35		選択研修Ⅰ (NISE 学びらボ等での個別研修) 【研究担当者会】 研究計画検討(教務部と)
4	5月26日(金)	50		全体研修2 「知的障がい教育における教育課程の編成の基礎」 講師：教務主任 山口弘高先生
5	6月6日(火)	35		選択研修Ⅱ (NISE 学びらボ等での個別研修) 【研究担当者会】 研究計画検討(教務部と)
6	6月28日(水)	35		選択研修Ⅲ (NISE 学びらボ等での個別研修) 第2回 研究推進委員会
7	7月11日(火)	35		令和5年度 校内研究 全体説明会①
8		50		令和5年度 校内研究 全体説明会②
9		120		全体研修3 「これからの特別支援学校における各教科等を含めた指導と教科別の指導の在り方について」 宮崎学園短期大学 教授 松田昭恵先生
10	夏季休業中			
11		120		全体研修4 「知的障がい教育における目標設定と学習評価について」宮崎県研修センター指導主事 川畑恵理先生
12		50		班別研究①
13		50		班別研究②
14	9月26日(火)	35		班別研究③
15	10月13日(金)	50		班別研究④
16	10月30日(月)	35		班別研究⑤
17	11月10日(金)	50		班別研究⑥
18	12月8日(金)	50		班別研究⑦
19	冬季休業中	50		班別研究⑧
20	1月16日(火)	35		班別研究⑨
21	1月19日(金)	50		班別研究⑩
22	3月5日(火)	35		選択研修Ⅳ (NISE 学びらボ等での個別研修) 第3回 研究推進委員会
23	3月8日(金)	50		令和5年度 校内研究 全体報告会

4 年間指導計画について

研究を行うにあたって、本校の年間指導計画の現状と課題の整理を行った。

方法は、①学習指導要領に記載されている年間指導計画の内容や計画に必要な項目について整理する、②整理した項目について、現在活用している本校の年間指導計画に照らし合わせて現状の整理をする、③その結果導き出された本校の年間指導計画の課題についてまとめる、という3つの手順で行った。以下にその結果を記す。

(1) 年間指導計画作成における法令等の位置づけ

年間指導計画は、学習指導要領総則（文部科学省、2018）に記載されている「各学校においては次の事項に配慮しながら学校の創意工夫を生かし全体として、調和のとれた具体的な指導計画を作成するものとする。（文部科学省、2018）」を根拠として作成するものとされている。また、内容については「その年度の各教科・科目等又は各教科等における学習活動の見通しをもつために、1年間の流れに沿って単元等を配列し、学習活動の概要を示したものである（文部科学省、2018）」と明記されている。具体的には、「指導目標、指導内容、指導の順序、指導方法、使用教材、指導の時間配当等を定めた具体的な計画を作成する」と作成する項目について示されていた。配慮事項としては、「各教科等及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにすること。（文部科学省、2018）」とあり、特に知的障がい特別支援学校においては、「各学校においては、各教科等を合わせて指導を行う際には、学年ごとあるいはホームルームごとなどに、各教科、道徳科、特別活動のそれぞれの目標及び内容を基にして、それらの目標の系統性や内容の関連性に十分配慮しながら、指導目標、指導内容、指導の順序、指導の時間配当等を十分に明らかにした上で、適切に年間指導計画等を作成する必要がある。その際、個々の生徒に必要な自立活動の指導目標及び指導内容との関連性にも十分留意が必要である。（文部科学省、2018）」と明記されており、学年や学部の系統性や他教科との関連が重要であることが示されていた。

(2) 本校の年間指導計画の現状の整理

法令等の位置づけや学習指導要領の内容から、年間指導計画に必要な項目を「指導目標（3観点）」、「指導内容」、「指導の順序（時期）」、「指導方法」、「使用教材」、「指導の配当時間」として、現在、本校で活用されている年間指導計画についてそれぞれの項目が含まれているかどうかの整理をした。

その結果、学校全体でみると（図1）、どの項目も80%以下であり、「指導目標」の観点別目標が一番低く14%であった。学部別では、小学部では（図2）、「指導の順序」や「指導の時間配当」が80%以上で達成していたが、それ以外は50%以下であった。中学部では（図3）、「指導内容・方法」、「指導の順序」では80%以上であったが、それ以外は30%から80%の間であった。高等部では（図4）、中学部と同様の結果であったが、観点別評価についての記載は見られなかった。

(3) 本校の年間指導計画の課題

以上の結果等から、現行の学習指導要領に沿って本校の年間指導計画を見直した際に、以下の3点について課題があると考えられた。1点目は、現行の学習指導要領へ移行する際に、小・中・高等部それぞれに校内研究等で検討が行われているが、学部毎での取組であり、進捗状況に差があること。2点目は、小・中・高等部それぞれに年間指導計画の書式があり、学校全体で統一した書式になっていないこと。3点目は、学校全体としての検討も十分行われておらず、小・中・高等部全体を見たときに、学びの系統性が十分に整理されていないこと。

(2) 法的根拠に基づいた本校の年間指導計画の項目ごとの整理及び分析

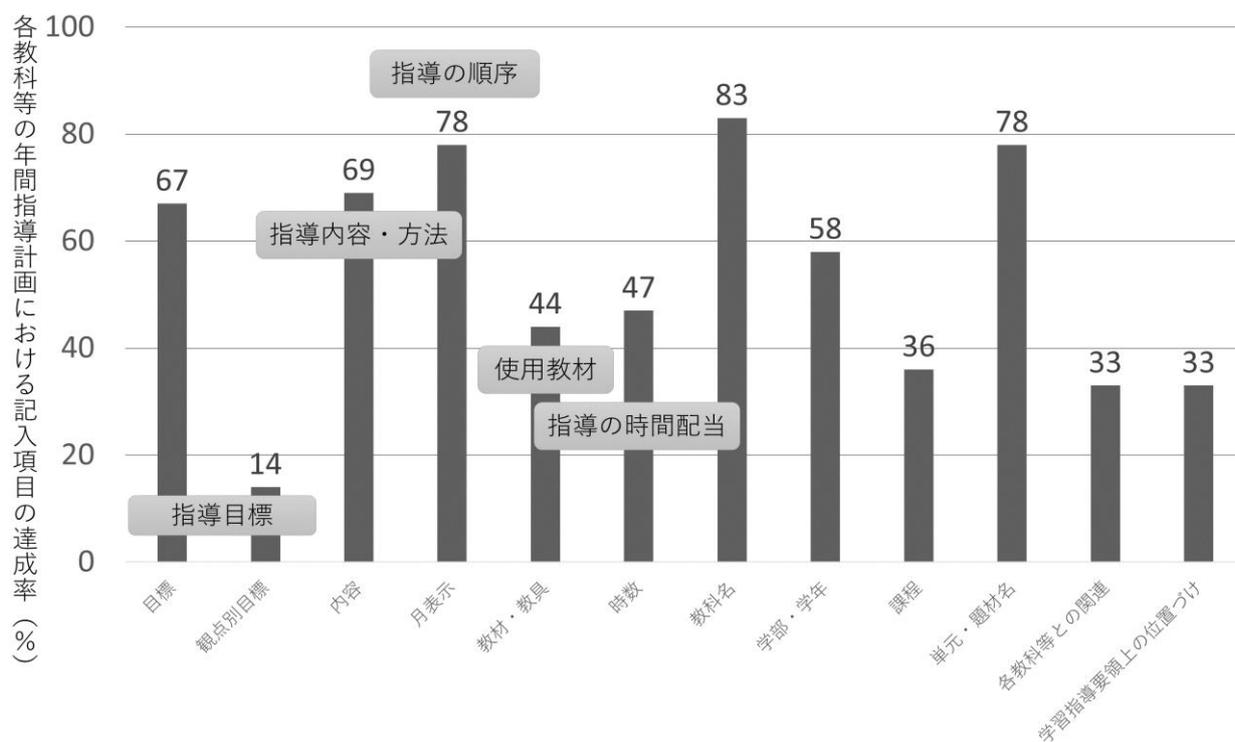


図1 本校の年間指導計画の整理 (小・中・高等部 全体)

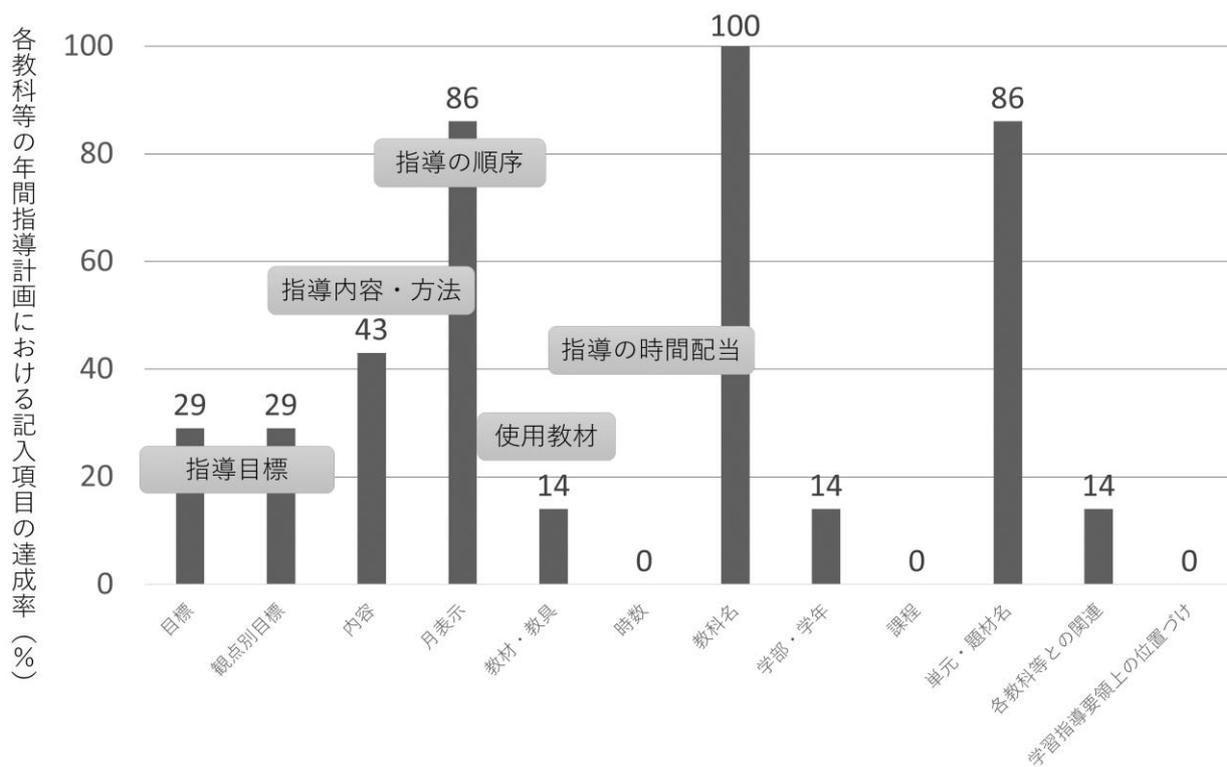


図2 本校の年間指導計画の整理 (小学部)

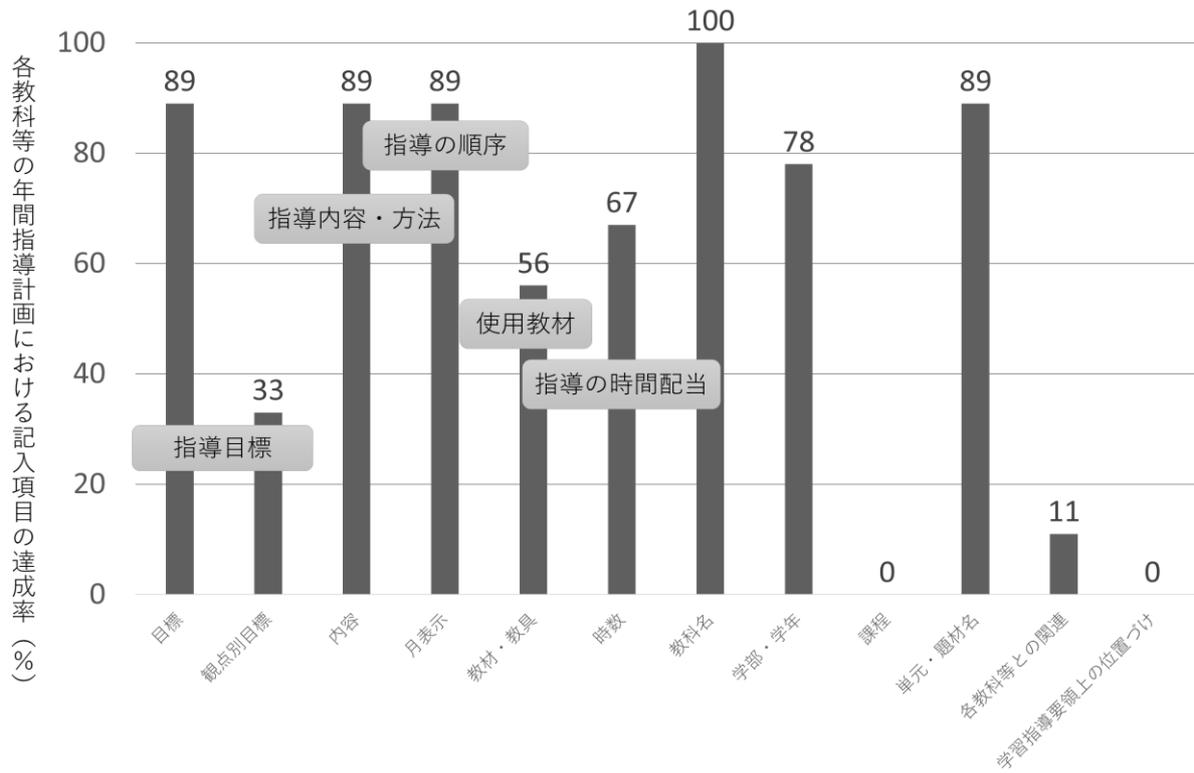


図3 本校の年間指導計画の整理 (中学部)

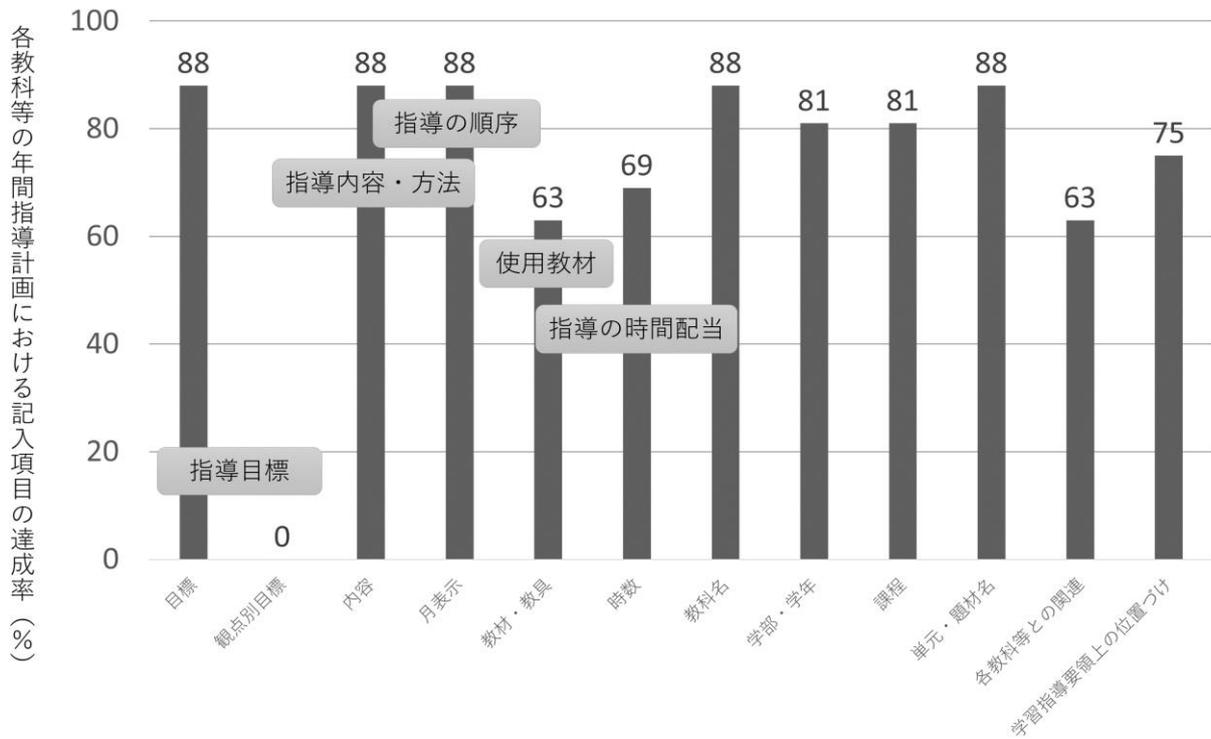


図4 本校の年間指導計画の整理 (高等部)

5 研究方法

(1) 年間指導計画の見直しと検討に向けて

研究の1つ目の目標である「学習指導要領に対応した年間指導計画の整理や検討を行う。」については、本校の年間指導計画の課題の整理の結果から、以下のような手順・方法で研究に取り組むこととした。

- ① 各教科で小学部から高等部までを見据えた単元・題材配列表を作成する。(令和5年度)
- ② 学習指導要領に則った形での本校としての年間指導計画の書式について検討・作成をする。(令和5年度)
- ③ 各教科で小学部から高等部まで、各学年で各課程での基本となる年間指導計画を作成する。その際、目標については、3観点を明記し、3観点に沿った目標を明記する。(令和6年度)

また、2カ年で取り組む研究であるので、今年度の研究のゴールとしては、小・中・高等部すべてに共通する日常生活の指導、生活単元学習、国語科、算数・数学科、音楽科、保健体育科、図画工作・美術科、特別活動の8について、小学部から高等部まで12年間を見通した系統性について整理・検討することとした。併せて、本校で今後活用をしていきたい基本となる年間指導計画の書式についても、課題等を集約して次年度以降に活用できるものを作成することとした。

(2) 校内研修の充実に向けて

研究の目標の2つ目である「職員全体に向け、現行の学習指導要領の理解や知的障がいのある児童生徒の指導について基本研修を計画する。(教育研修センターの新研修制度・NISE 学びラボ・OJTを活かした本校の職員による研修などを活用した専門性を維持・向上するための研修計画の体系化、組織化)」については、昨年度まで行ってきた全体研修やニーズ研修などは継続して取り組みを行い、今年度新たに「NISE 学びラボの活用」、「研究通信の発行」、「相互授業参観の実施」について取り組みを行い、研修動画の視聴回数・時間や職員アンケートの結果を基に必要性や有効性などの検証を行った。

※注 NISE (ナイセ) 学びラボ：NISE 学びラボとは、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所が行っている「障害のある児童生徒等の教育に携わる教職員の資質能力向上を図る主体的な取組を支援するため、インターネットによる講義配信「NISE 学びラボ」～特別支援教育 e ラーニング～」のことである。

利用者登録(学校単位でも申請可能)を行うことで、パソコンやタブレット端末、スマートフォン等から、個人が職場や自宅など様々な場所でいつでも視聴できるようになっている。

内容は、1コンテンツ15分から30分程度で、特別支援教育の基礎的な内容を始め、各障がいについての指導法、小中学校向けの内容など、170以上のコンテンツが視聴できるようになっている。

II 研究の実際

I 年間指導計画の見直しと整理について（校内研究）

(1) 12年間の学びの配列表の作成について

それぞれの研究班で小学部から高等部までの12年間の学びの整理を行い、配列表としてまとめた（巻末資料①）。以下、表2から表9に各研究班の成果と課題について研究報告書として示した。

表2 ①日常生活の指導 研究班 研究報告書

<p>研究成果 アンケート結果 (自由記述)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 各学部の年間指導計画をしっかりと見る良い機会となった。 小中高の情報交換・連携がとれてよかった。 他学部との情報交換ができてよかった
<p>協議を通して出てきた課題 (●)</p> <p>課題に対する改善策(→)</p>	<p><現行の年間指導計画></p> <ul style="list-style-type: none"> 小学部…片面1枚に全教科・領域がまとめられていて、日生に関しては大まかな項目と細目のみ記載されている。よって、●日生単独の年間指導計画はない。 →日生で一枚、年間指導計画を作成する。 中学部…片面一枚の年間指導計画がある。●全学年共通のものを使用。 →活用しやすいように学年ごとに作成するのが望ましい。 高等部…両面一枚の年間指導計画がある。●学年ごとに作られているが、内容はほぼ同じである。 →内容によっては、発達段階に応じた内容を検討する必要がある。 <p><学部ごとの年間指導計画を見比べて気付いた課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学部ごとに書式や文言、項目にばらつきがあり、系統性がない。 → 同じまたは類似している項目をまとめて、小中高の学部共通で統一した文言の6項目(①登校、朝の活動②給食③清掃④排泄⑤健康・安全⑥午後の活動、帰りの会)に整理した。その上で付随する細目をつくり、学部独自の内容があれば、記載していく。 ● 日生は、他教科・領域と性質が異なるため、決められた年間指導計画の書式には当てはめにくい。 → 日生は一年間を通しての指導であるため、月の枠をなくして大きな枠にする。中身の部分は、基本の書式をベースに6項目を区切って記載していく。 ● 学部や課程によって時数が異なる。 → それぞれに時数制限があるため、年間指導計画の中から取捨選択することになる。実態によって柔軟に考えるようにする。(研究部長を通して校長先生に確認済み)
<p>次年度以降の検討課題</p>	<p>【試案I-1】“各教科等の基本の年間指導計画”の作成に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> 月・時数については、「年間を通して指導する」と記入する。 単元(題材名)・指導内容については、【試案I-2】“12年間を見通した題材配列表”の6項目と付随する細目をそのまま挿入する。加えて、指導内容に記載した方がよいと思われる内容については引き続き検討していく。 単元(題材)目標・各教科等との関連を検討する。 その他…「着替え」を新設して取り上げるかどうか。(中高等部は、登校後と下校前の着替えに限らず、作業着から校内着への着替えもあり、朝の活動、下校前の活動に限定されないため。)「着替え」を新設した場合、6項目→7項目になる。

表3 ② 生活単元学習 研究班 研究報告書

<p>研究成果 アンケート結果 (自由記述)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 班で学部内での系統性、小・中・校の系統性を考慮しながら題材配列表を作成することができた ・ 今後も可能な限り議論を続けながら、使いやすい年計になるように研究を深めていくとよい。 ・ 2カ年での研究なので、成果についてはまだ言えないが、生単の見直しや整理のきっかけになったと思う。 ・ 小・中・高が統一された様式になった。 ・ 他の学部の資料も参考にすることで、わかりやすい年計や取り入れていない題材について知ることができた。 ・ 他学部の年間計画を見るきっかけになった。 ・ 不足している教科の内容を見直すことができた。 ・ 他校の年間指導計画を見て、指導内容の検討を行い、いろいろな内容の取り扱い方の違いがあることや、生活単元学習の中に、理科や社会の内容を取り入れることなどを行い、いろいろな視点があることが勉強になった。 ・ 単元名を表にまとめた
<p>協議を通して出てきた課題と改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 年間指導計画の発展性が見えづらい。 → 内容ができるだけ発展的な内容になるよう、現在の年間指導計画の内容を少しずつ変更させたり、新しい内容を追加したりしながら単元配列表作成を行った。 ○ 学部によって、生活単元学習としてカウントしている行事が異なる。 → 行事の時数カウントを整理し、全学部でのすり合わせが必要である。
<p>次年度以降の検討課題</p>	<p>今年度は、学習指導要領や令和6年度の教科用図書をもとに、現在の年間指導計画に各学部・学年で取り扱うべき「生活科」「理科」「社会科」の内容を付け足す作業を行った。しかし、時数や行事との兼ね合い、時間割の配置等によっては、今年度付け足した内容を取り扱うことが難しいことも考えられる。そのため次年度、生活単元学習班のメンバーだけではなく、各学部の先生方で内容を見ていただき、修正や削除等行う機会を設けていただきたい。</p>

表4 ③ 国語科 研究班 研究報告書

<p>研究成果 アンケート結果 (自由記述)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 各学部での国語の学習の内容や学習グループの違いを知ることができたこと。 他校の指導内容を見ることができたこと。 系統的な指導に必要な課題が見つかったこと。" 12年間を見通しての題材一覧表の作成は有り難かったです。 他学年の教科書や、学習内容について知ることができました。 小学部～中学部では、系統性のある学習設定が必要であると思いますが、生徒の理解度に応じて内容や程度も変わるため、難しい部分もあるなど感じました。 他学部の先生方と教科の授業の様子を話し、他学部の内容を知ることができ、系統的に考えていく必要性を感じました。 他学部の年計や授業についての具体的な様子について、知ることができた。 単元配列表を作成することができた。 														
<p>協議を通して 出てきた課題</p>	<p>これまでの年間指導計画や先生方の実践をもとに一覧表を作成し、内容を観点別に整理した。観点で不足している内容を補うかたちで改めて一覧表を作成した。作成するにあたり、出てきた課題が以下の通りである。</p> <p>(小学部)：現年計では、学担裁量で作成されており、学校全体を通して、系統的・発展的な指導ができていたとは言いがたい。年間指導計画も活用しているとは言いがたい。</p> <p>(中学部)：現年計に記載されているものは、生単で取り扱うことがほとんどである。</p> <p>(高等部)：発展性というよりは、繰り返しの定着をねらいとし、1～3年生で系統性をもって計画が立てられている。</p> <p>(まとめ)</p> <ul style="list-style-type: none"> 教科書の採択に学校全体での規定がないため、中学部で使用したい教科書を小学部段階で採用してしまっているなどの現状がある。学校全体で統一された年間計画を作成するのであれば、教科書も一定の採用規定が必要ではないか。 生単と自立との棲み分けが明確になっていない。 														
<p>課題に対する 改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> 教科書採択に規定を設け、学習すべき内容を明確にしていく。(以下に案を示す) <table border="1" data-bbox="384 1339 1378 1686"> <thead> <tr> <th>学年</th> <th>使用教科書案</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>小1～4</td> <td>一般図書</td> </tr> <tr> <td>小5</td> <td>ゆっくり学ぶ子のためのこくご1</td> </tr> <tr> <td>小6</td> <td>ゆっくり学ぶ子のためのこくご2</td> </tr> <tr> <td>中1</td> <td>ゆっくり学ぶ子のためのこくご3</td> </tr> <tr> <td>中2、3</td> <td>ワーク</td> </tr> <tr> <td>高1～3</td> <td>くらしに役立つワーク 国語</td> </tr> </tbody> </table>	学年	使用教科書案	小1～4	一般図書	小5	ゆっくり学ぶ子のためのこくご1	小6	ゆっくり学ぶ子のためのこくご2	中1	ゆっくり学ぶ子のためのこくご3	中2、3	ワーク	高1～3	くらしに役立つワーク 国語
学年	使用教科書案														
小1～4	一般図書														
小5	ゆっくり学ぶ子のためのこくご1														
小6	ゆっくり学ぶ子のためのこくご2														
中1	ゆっくり学ぶ子のためのこくご3														
中2、3	ワーク														
高1～3	くらしに役立つワーク 国語														
<p>次年度以降の 検討課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> 教科書採択に規定を設け、年間指導計画の目標や内容を教科書に沿って、作成していくことで、系統的・発展的な指導ができるようになるのではないかと。 同じ単元名が連なる月もあるので、目標や内容で系統性や発展性を示す必要がある。 生活単元学習、自立活動、国語での学習内容の違いを明確にする。 (例)～挨拶の指導～ 自立活動→話す人の方向を見る、実態に応じたコミュニケーション手段 国語 →挨拶などの言葉のやりとりや表現になれ、身につける 														

表5 ④ 算数・数学科 研究報告書

<p>研究成果 アンケート結果 (自由記述)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ これまで使われてきた年計が学習指導要領の内容を網羅していないことが分かり、網羅する内容に更新することができたこと。 ・ 各学年で取り扱う題材一覧を作成することができた。 ・ 月単元をきめておくと、教材準備などスムーズにできると思いました ・ 年計は大切なので現行にあわせた年計作りができて良かったと思う。
<p>協議を通して 出てきた課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 金銭の支払いについて、学習指導要領では、算数の指導内容に含まれていない。 ・ 学習指導要領の学習内容を全て扱うことによって、児童生徒の実態似合わない可能性がある。 ・ 今回、小学部の1段階を1・2年生、2段階を3・4年生、3段階を5・6年生、中学部の1段階を1・2年生、2段階を2・3年生、高等部の1段階を1・2年生、2段階を2・3年生とすることで、年間指導計画の系統性は確保できるが、実態に応じた年間指導計画と言いがたい。 → 例えば、小学部2段階で初めて教科書で数字が扱ってあるが、小学部1年生から扱う必要があるのでは。 ・ 実態に応じて下学年の年間指導計画を使用する場合、一部のみ入れ替えるのか、全て入れ替えるのか。 ・ 学習指導要領に対応するかたちで題材配列表の作成を行ったが、実態に応じて下学年や上学年の年計を使用することで、指導者によって扱う内容の差が生じる可能性がある。 ・ 実態別で授業を行っていない小学部は特に、児童の実態差が大きく1つの年計で授業を行うことが難しい。
<p>課題に対する 改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 金銭の支払いは、百の位の数など扱うことが可能な指導内容と合わせて全学年で1年間に1度は扱うようにする。実践的な買い物などは合わせた指導で行う。
<p>次年度以降の 検討課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実態に応じて下学年の年間指導計画を使用する場合、一部のみ入れ替えるのか、全て入れ替えるのか。 →年間指導計画の扱い方

表 6 ⑤ 音楽科 研究報告書

<p>これまでの 取り組み</p>	<p>『12年間を見通した資料』の確認 ① 小・中・高の年間指導計画のすり合わせ →各学部の内容など初めて知ることもあった。 ② 他県、他校の情報収集 ～授業実践の情報交換及び協議（Q&Aの作成）～ →いろいろなまとめ方があり、学部によっても違いがあることを知った。</p>
<p>成果と課題</p>	<p>【①、②について】 ・ 年間指導計画の中に、教材配列表等、どの学年でどの時期にどんな教材を使用したのか具体的にあると手助けになる。 →小学部や他校の資料を参考に作成する。 【②について】 ・ 授業について話し合いの場を設けたことで、児童生徒の見立て、授業実践、課題等の確認ができた。</p>
<p>研究成果 アンケート結果 (自由記述)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 班員の小、中、高の職員で、今、授業をしている上で困っていることを話す機会を何度か設けた。そこで出てきた質問等を、「授業実践の Q&A」として一覧表を作成し、授業に関するものや、音楽の考え方について知ることができてよかった。来年度も作成したい。 ・ 授業作りでの悩みや困っていることなど専科の先生方からアドバイスしていただくことができ、活かすことができた。 ・ 授業実践のアイデアをたくさんいただき、授業に活かすことができた。 ・ 通常クラスと重複クラスが同じ楽曲で活動するための工夫など、アイデアをもらうことができた。 ・ 年間指導計画など他校の資料と比較することができたことはよかった。また、小学部、中学部の年間指導計画に初めて目を通して、学習のつながりがあるのか等考えることができよかった。また、縦のつながりがもてる機会になったためよかった。
<p>次年度以降の 検討課題</p>	<p>『年間指導計画』を作成 ○ 上記①、②を踏まえて作成する。 ・ 他校（日向ひまわり支援学校）のを参考に、「単元（題材名）」「指導内容」「具体的な教材名」を挿入していく。 ・ 作成しながら、「単元（題材）目標」も見直していく。</p>

表7 ⑥ 図画工作・美術科 研究報告書

<p>研究の成果 アンケート結果 (自由記述)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他学年や他部門の先生方と話せるチャンスを設けていただき、大変貴重な話がうかがえた。 ・ 題材ごとの細かな目標やねらいが確認できた。 ・ 小中高の連携が大切だということが分かった。 ・ より簡素で見やすく、機能的な様式ができそうな感じがしている。その過程で、小学校や中学校の題材や先進校の年計を調べることでおおいに参考になった。 ・ 改めて教科の視点から制作活動について考えることで、図画工作と生単における制作活動の違いが明確になった。日々の授業の中で活動内容が混合し、曖昧になってしまうこともあったが、今後は学部における図画工作の目標の役割をしっかり考えていきたいと感じた。 ・ 小中高の縦割りのグループでの活動になったので、各学部間での授業の様子や課題としていること等の情報交換ができたり、専科の先生方から授業作りのアドバイスをいただけたことが良かった。そのような話をしながら、今後の図工美術の指導について一緒に考えることができた。 ・ 小中高の年計を確認することで、見通しがもてた。 ・ 他学部の教科の取り組みや実際について知ることができた。 ・ 単元表作りに協力して取り組み、完成させることができた。 ・ 話し合いをする中で、どのような内容を年間指導計画に入れるか、考える機会になったのがよかった。
<p>協議を通して 出てきた課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 図画工作・美術は、“表現”と“鑑賞”の2つの領域があるが、鑑賞は作品展等の関係で、時期によってどのような題材を扱うかの計画が立てやすい。しかし、表現は、時期に左右されない内容も多く、時期を固定して年計を立てると、毎年同じ時期に同じ様な作品ができるという状況になりかねない。 ・ 教科の特性として、表現方法や個々のものの見方・考え方などは限りないため、内容を段階的に配列し、各学年、月ごとに題材を固定化させることが難しい。 ・ 季節や行事に関連した製作物は、生活単元学習の要素が強い。図画工作・美術の教科別の指導の中では、教科の目標に沿った内容の授業を行うべきではないか。
<p>課題に対する 改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 鑑賞は時期によって題材が決まってくる部分が多かったため、表現と鑑賞の領域別で題材一覧表を作成した。 ・ 題材名だけでなく、学習指導要領に示されている材料や用具等も含めた一覧表にすることで、指導者がどのような授業づくりをすればよいのか、一覧表を見てイメージしやすくした。また、児童生徒が12年間で様々な表現を経験する必要があることが一覧で見ることができようにした。 ・ 題材名については、小中学校の教科書を参考にして記入したが、扱う材料や用具、技法等が同じであれば、児童生徒の実態に応じた題材名を設定して授業を行っても良いと考えている。 ・ 各学年でそれぞれの領域(表現(平面、立体、造形遊び)、鑑賞)を全て扱うこととするが、実施時期は授業者が組み立てる形にした。
<p>次年度以降の 検討課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今回作成した一覧表は、学部の区切りはあるが、学年の区切りはない。中学部、高等部は美術専科の授業であり、現状として、1つの題材に数時間かけて取り組んでいるため、各学部3年間を通して学部の欄に示された内容を網羅する形で授業を行うことが可能である。小学部は各学年、各学級で図画工作の授業を行っており、1つの題材を1回の授業で終えることもあるとのことで、一覧表の内容を網羅するために、授業時数や各学年への配分、引継ぎの方法等考える必要がある。 ・ 上記のことから、次年度作成する各学部・学年ごとの年間指導計画に、今回作成した一覧表をどのように反映させていくか検討が必要である。

表 8 ⑦ 保健体育科 研究報告書

<p>研究の成果 アンケート結果 (自由記述)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 12年間を見通した体育の年間指導計画を見直すことができ、他学部との違いや繋がりに気づくことができた。 ・ 各学部の計画について共通理解を図ることができたと思います。 ・ 学部間の繋がりを明確にすることで、段階的な目標設定を考えることができた。 ・ 気候や学校行事等による制限を加味した、単元の見直しをすることができた。 ・ 他の学部との年間指導計画について見直すことで、今後、縦の活動の流れが分かりやすくなると感じた。 ・ 他学部の状況がわかりました。特に体育の免許やこれまで体育の授業に携わってこられていない先生方が活用しやすい研究内容になるよう話し合いが進んだと思います。
<p>協議を通して 出てきた課題</p>	<p>試案Ⅰ—2『12年間を見通した子供たちの学びがわかる資料』の作成</p> <p>① 試案Ⅰ—2の加筆修正が必要であること。 → 「保健」「体育理論」の一部を特別活動の中で実施しているため、記載できなかったこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学年間を見通した内容の検討が必要であること。 など <p>☆ 月別の表にしているが、単元ごとに示した方が、より縦のつながりを見ることができてよいのではないか。</p> <p>② 学部ごとの協議はできたが、班全体で協議する時間を確保できなかったこと。</p>
<p>課題に対する 改善策</p>	<p>① 研究班だけでなく、学部の体育担当者にも情報提供しながら、加筆修正を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 試案Ⅰ—2に検討事項を吹き出して記載していく。 ・ 特別活動研究班とも情報交換し、試案Ⅰ—1『各教科等の基本の年間指導計画』への記載の仕方を検討する。 ・ 表の形式について単元ごとに並べ替えて作成する。 <p>② 学部ごとで協議したことを踏まえて、班全体で協議する時間を計画的に設定して進める。</p>
<p>次年度以降の 検討課題</p>	<p>試案Ⅰ—1『各教科等の基本の年間指導計画』を作成</p> <p>○ 上記①②を踏まえて試案Ⅰ—1を作成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 試案Ⅰ—1をもとに、「単元(題材名)」「指導内容」を挿入していく。 ・ ②参考資料(班員に配布済み)を見ながら、「単元(題材)目標」を設定していく。

表9 ⑧ 特別活動 研究報告書

<p>研究の成果 アンケート結果 (自由記述)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 12年間の題材配列表(学級活動)を作成した ・ 各学部合同で特別指導の年計を整理することができた。 ・ その過程の中で、他学年との情報共有をしながら、本校の特別活動の概要を捉えることができたことも一つの成果といえた。 ・ 学部間の話し合いによって、疑問点や今後の取り組みについて分かってきた。 ・ 特別活動の学級活動の時間の指導内容一覧を作成することができた。
<p>協議を通して 出てきた課題 と改善策</p> <p>●課題 →改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 特別活動全体計画の書式や文言が学部で異なり、活用しにくい。 → 今年度、校内研究特別活動班で書式や文言を統一したものに作り直す。 ● 学級活動の年間指導計画が小学部、中学部にはない。 → 今年度、校内研において学級活動に焦点を当てた12年間の題材配列表を作成する。 ● 児童生徒の集いの時数について、小・中学部は特別活動、高等部は行事カウントと異なる。 → 教務主任や各学部主事と相談し、時数をそろえる方向で検討していただくと良いのでは。 ● 中学部、高等部では、生徒会活動やSB生集会等を昼休みに実施しており、年間指導計画に記載がないものがある。 → 時数計上していなくても実施している活動については、なんらかの形で全体計画に記載する。 ● せいの学習について、小学部は全て特別活動計上、中学部、高等部は特別活動と保健体育で計上している。(今年度…中学部：5/10特活、5/10保体 高等部：4/10特活、6/10保体) → 小学部は現行のままで良いのか、中学部や高等部のように内容によっては体育でのカウントを行うのか等、保健体育班やせい教育担当者で協議していただけると良い。 ● 小学部の遊びの集いについて、小学部独自の学習内容であるが、人権教育の目標や内容と近いと考える。 → 人権教育として位置づけて良いか学部に関る必要がある。
<p>次年度以降の 検討課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今年度は、特別活動について、小、中、高で行っている内容について、年間指導計画を見比べ、課題の整理を行った。課題を共通理解した上で、特別活動の全体計画と学級活動の題材配列表の作成を行うこととした。両者については概ね完成している。 ・ 次年度以降は、試案Ⅱの検討を行う。特別活動班では、学級活動についての作成を行うが、その他、進路学習や主権者教育、せいの学習等も同様の書式で作成できると良い。特活班のみでの作業となると厳しいので、各担当者で相談しながら、試案Ⅱの作成に向けて取り組んでいければと思う。

(2) 年間指導計画の書式について

年間指導計画の書式の作成については、以下のスケジュールで進めていくことを教務主任と確認した。

- ① 研究部より年間指導計画の書式についての教務主任へ提案（8月）
- ② 教務部会で検討（9月）
- ③ 検討したものを研究部で協議（10月）
- ④ 協議したものを再度教務で確認してもらい教務から管理職へ提案（11月）
- ⑤ 管理職の了承が取れたら教務より全職員へ説明を行う（12月）

研究部からは、資料Ⅰ「試案Ⅰ-Ⅰ 各教科等の基本の年間指導計画」の提案を行った。その後、教務部での検討が十分にできず、②から⑤までの内容については、検討課題として残った。

2 校内研修の充実に向けて

研究部では、「障がいのある児童生徒の教育に関する専門性を高める研修を行うとともに、職員研修について組織化、体系化を検討し、教育活動の活性化を図る。」を目的に校内研修を行った。

今年度は、働き方改革や新型コロナウイルスが5類感染症に移行したことも踏まえ、「それぞれが知りたいことを、気軽に、いつでも、どこでも、主体的に学べる」研修体系を組織することを目指して以下の5つの取組を行った。

(1) 全体研修

校内の全職員に対して校内研究や特別支援教育に関する専門的な知識や理解を深め、職員の専門性の向上を図ることを目的として、表10にあるように4回の全体研修を行った。今年度の研究テーマ「今と将来をよりよく生きる子どもの育成を目指す教育の在り方～子どもの学びを確実にするカリキュラム・マネジメントの検討～」に沿って、特別支援教育や知的障がい教育に関する基礎的、基本的な内容の研修を行った。

その結果、松田昭憲先生の研修では、ほとんどの職員が自身の専門性の向上に役立ったと回答しており(図5)、川畑先生の研修とともにアンケートでは、「やる気のでる内容であった」、「勉強になった」、「分かりやすい内容であった」など肯定的な意見が多く聞かれた。

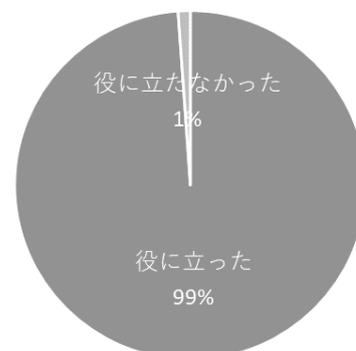


図5 アンケート結果(全体研修が自身の専門性の向上や児童生徒の指導・支援に役立ったか)

表10 令和5年度 みやざき中央支援学校 全体研修一覧

日程	テーマ	講師
4月21日(金)	特別支援学校の学習指導要領の改訂のポイント	校長 松田律子先生
5月26日(金)	知的障がい教育における教育課程の編成の基礎	教務主任 山口弘高先生
8月22日(火)	これからの特別支援学校における各教科等を合わせた指導と教科別の指導のあり方について	宮崎学園短期大学教授 松田 昭憲 先生
8月23日(水)	知的障がい教育における目標設定と学習評価について	研修センター指導主事 川畑 恵理 先生

(2) ニーズ研修(対面によるニーズ研修)

ニーズ研修では、指導・支援におけるニーズを把握し、知りたい内容を届けられるよう、表11のような内容で研修を行った。また、初期研修と兼ねながら講師にとっても負担にならないように配慮した。

その結果(図6、7)、職員の半数以上がニーズ研修に参加しており、ニーズ研修に参加した9割の職員が「自身の指導・支援に役に立った」と回答した。自由記述においても、「すぐ実践したくなる内容ばかりでした」、「経験豊かな先生の具体的な指導と支援を聞くことができました」、「指導する上での細かい配慮やコツを知ることができました」などと言った感想が挙げられていた。また、講師をした職員からも「新たな学びを得ることができた」という声が聞かれた。

表 11 令和 5 年度 みやざき中央支援学校 ニーズ研修一覧

日時	内容	講師（本校職員）
8月2日(水)	子どもたちの個性を伸ばす芸術活動・余暇につながる活動	新城 美由紀先生
8月18日(金)	障がいの特性に応じた指導・支援 (自閉症、ダウン症について)	栗原 真輝先生
9月21日(木)	知的障がいのある子供の理解と支援 ～児童生徒の困り感についての基本的な考え方とその対応～	水野 啓三先生
11月28日(火)	肢体不自由のある子供の理解と支援（医療的ケアを含む）	黒木 亜矢先生
12月14日(木)	特別支援学校のセンター的機能について ～チーフコーディネーター業務を通して～	道本 ゆかり先生

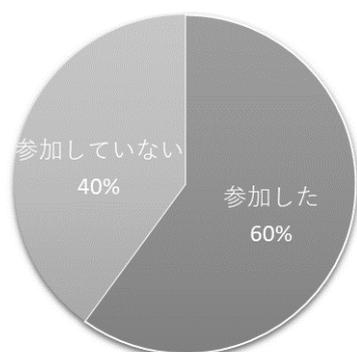


図 6 アンケート結果（ニーズ研修への参加）

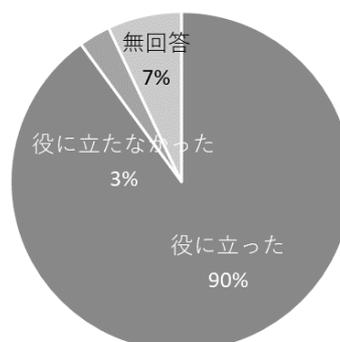


図 7 アンケート結果（ニーズ研修が自身の専門性の向上や児童生徒の指導・支援に役立ったか）

（3） NISE 学びラボ（オンデマンドによるニーズ研修）

年度初めに学校として利用申請を行い、県から支給されているメールアドレス（Gmail）で職員全員の利用登録を行った。視聴内容は、全てのコンテンツを見ることができるようにし、視聴開始の案内については、個人のメールアドレスに送付し、各自が好きな時間に好きな場所で見るようにした。

その結果、107名の職員が延べ351回視聴を行っており、合計視聴時間は17時間を超えていた。また、表12、13にあるように、それぞれのニーズに応じて95のプログラムの視聴があった。活用に関するアンケートの結果（図8、9）では、活用したと回答した職員の9割が「自分の指導・支援に役立った」と回答した。

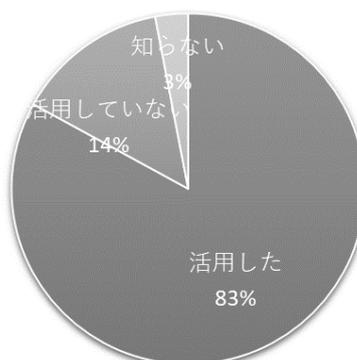


図 8 アンケート結果（学びラボの活用）

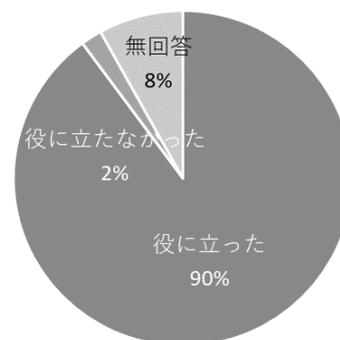


図 9 アンケート結果（学びラボが自身の専門性の向上や児童生徒の指導・支援に役立ったか）

表 12 NISE 学びラボで 1 年間に視聴されたコンテンツ名、視聴回数・時間（視聴回数順）①

No.	コンテンツ名	回数	時間 (h:m:s)
1	共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築	22	8:40:44
2	知的障害教育における自立活動の指導	15	1:54:38
3	自閉症のある子どもの実態把握	13	4:59:42
4	発達障害のある子どもの思春期の課題と支援(前半)	13	5:52:17
5	特別支援教育における教材・教具の活用	12	2:13:20
6	知的障害の理解と教育的対応の基本	12	3:55:21
7	特別支援教育におけるカウンセリング技法	9	2:00:25
8	自閉症のある児童生徒の家族支援	9	3:14:48
9	特別支援教育におけるICTの活用	9	3:19:29
10	知的障害教育における主体的・対話的で深い学び	7	1:49:23
11	高等学校段階(思春期)における障害のある生徒の心理と自己理解	7	4:11:26
12	知的障害教育における各教科等を合わせた指導②-日常生活の指導、遊びの指導-	7	0:57:14
13	ADHDのある子どもの理解と対応	7	3:06:53
14	発達障害のある子どもの思春期の課題と支援(後半)	7	2:13:09
15	自閉症のある子どものためのソーシャルスキル指導	7	2:11:47
16	医学的理解-行動上の問題・てんかん-	7	3:44:30
17	特別支援教育におけるICFの活用	6	1:06:35
18	強度行動障害の理解	6	2:25:00
19	手話の活用	6	2:39:57
20	情緒障害のある児童生徒の指導と対応	6	2:50:05
21	重複障害のある子どもとのコミュニケーションを支える環境づくり	6	1:23:42
22	インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(1)障害児教育の歴史	5	2:19:04
23	多様な学びの場(1)特別支援学校の教育	5	2:29:13
24	知的障害教育における教育課程の編成②-知的障害教育における各教科-	5	1:07:09
25	知的障害教育における各教科等を合わせた指導①-各教科等を合わせた指導の考え方-	5	0:48:52
26	自立活動の指導-指導計画の作成-	4	1:07:35
27	個別の教育支援計画と個別の指導計画① 学習指導要領上の位置付けと役割	4	0:59:32
28	個別の教育支援計画と個別の指導計画② 作成と活用	4	0:56:16
29	知的障害教育における教育課程の編成①-知的障害教育における教育課程の考え方-	4	1:03:42
30	自閉症のある児童生徒の自立活動の指導	4	1:04:15
31	知的障害教育における各教科等を合わせた指導③-生活単元学習、作業学習-	4	0:27:24
32	インクルーシブ教育システムにおける交流及び共同学習	4	2:29:20
33	合理的配慮と基礎的環境整備	4	0:44:26
34	知的障害教育の各教科における指導の工夫①-指導計画の作成と内容の取扱いの要点 小学部-	4	0:39:53
35	障害のある児童生徒における学習評価	3	0:31:11
36	情緒障害教育概論	3	0:56:02
37	肢体不自由教育における自立活動の指導	3	0:38:13
38	肢体不自由教育の実践その2	3	0:59:26
39	中枢神経系における障害	3	2:10:40
40	特別支援教育コーディネーター-役割と活動を中心に-	3	1:20:30
41	小学校音楽	3	0:38:02
42	幼児期の子どもをもつ保護者とのかかわり	3	1:06:51
43	障害のある児童生徒のキャリア教育	3	1:34:58
44	重複障害のある子どものコミュニケーション	3	0:50:27
45	LD・ADHD・高機能自閉症等教育概論(1)定義と判断	2	0:31:30
46	学習指導要領にみる特別支援教育	2	0:33:12
47	特別支援学校の地域におけるセンター的機能②-センター的機能が有効に発揮されるために-	2	0:18:23
48	インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(3)学習指導要領と教育課程	2	0:40:48
49	肢体不自由教育の実践その1	2	0:46:26
50	通常の学級における自閉症スペクトラム障害(ASD)のある児童生徒の指導の対応	2	0:34:41

表 13 NISE 学びラボで 1 年間に視聴されたコンテンツ名、視聴回数・時間（視聴回数順）②

No.	コンテンツ名	回数	時間 (h:m:s)
51	発生期、胎生期及び周産期における障害	2	1:31:16
52	活用してみようインクルDB～子供一人一人に応じた合理的配慮を検討するために～	2	0:21:22
53	重複障害のある子どもの実態把握と指導の基本的観点	2	0:57:26
54	インクルーシブ教育システムの構築	2	0:30:57
55	小学校体育	2	0:25:34
56	聴覚障害児への教育的支援	2	0:16:34
57	中高保健体育	2	0:22:00
58	言語障害の定義・特性・分類 言語障害教育の制度	2	0:33:44
59	特別支援学校の地域におけるセンター的機能①ーセンター的機能の考え方と内容ー	2	0:25:42
60	中高音楽	2	0:17:05
61	LD・ADHD・高機能自閉症等教育概論(3)特性の理解	2	0:23:41
62	LD・ADHD・高機能自閉症等教育概論(4)特性に応じた指導	2	0:41:51
63	中高美術	2	0:39:52
64	知的障害教育の各教科における指導の工夫②ー指導計画の作成と内容の取扱いの要点 中学部ー	2	0:12:18
65	聴覚障害児のコミュニケーション	2	0:36:58
66	教育課程の連続性と個に応じた指導の充実	1	0:22:16
67	インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(2)特別支援教育の理念と基本的な考え方	1	0:24:37
68	多様な学びの場(2)小学校・中学校等①	1	0:21:59
69	多様な学びの場(2)小学校・中学校等②	1	0:20:49
70	知的障害教育における教育課程の編成③ー知的障害教育における道徳科及び領域等ー	1	0:08:27
71	聴覚機能の理解と指導	1	0:18:05
72	中技術・家庭、高家庭	1	0:13:03
73	口唇口蓋裂の医療	1	0:17:14
74	障害のある児童生徒等に対する早期からの一貫した支援	1	0:03:47
75	知的障害教育の各教科における指導の工夫④ー指導計画の作成と各教科全体にわたる内容の取扱いー	1	0:06:34
76	関係性の障害とその対応	1	0:21:10
77	LDのある子どもの理解と対応	1	0:23:00
78	自閉症のある子どもの教育課程	1	0:29:35
79	小学校国語	1	0:16:55
80	小学校算数	1	0:12:52
81	小学校図画工作	1	0:11:59
82	小学校生活科	1	0:00:00
83	LD・ADHD・高機能自閉症等教育概論(2)学校における気づきと実態把握	1	0:27:49
84	幼児期の具体的な関わり方の実際	1	0:24:05
85	中社会、高地歴・公民	1	0:31:20
86	発達障害のある子どもの通常の学級における支援ー協同学習による一人一人のちがいを生かす支援ー	1	0:18:43
87	インクルーシブ教育システムにおける専門性と研修	1	0:27:14
88	中高道徳	1	0:08:35
89	教育と福祉・医療等との連携	1	0:31:18
90	検査の意義とアセスメントーアセスメントの目的と意義ー	1	0:30:35
91	主な検査の種類と方法及び留意事項ー発達検査法と知能検査法ー	1	0:32:11
92	知的障害教育の教育課程の歴史①ー知的障害教育の学習指導要領制定までの歩みー	1	0:14:21
93	子どもの身体発育と運動発達	1	0:15:28
94	聴覚障害児の自己理解と教育	1	0:10:04
95	自閉症教育概論	1	0:24:08

(4) 研究通信

今年度から「ア：情報発信・情報共有により、特別支援教育に関する様々なつながりが豊かになり、今後の指導力向上はもちろん前向きな気持ちで児童生徒と接していくこと」、「イ：研究・研修と実践をつなぐ、人と人をつなぐ、人と研究・研修をつなぐ、研究・研修のよさ・楽しさ・面白さを伝える、研究・研修につながる熱い想いをつないでいく」を主なテーマとして、8月から表14に示した内容をPDFファイルにして、校務支援システムを活用して校内職員に電子データで配布を行った。

その結果、9割近く（100名近く）の職員が研究通信に目を通し（図10）、そのうち9割近くの職員が役に立ったと回答した（図11）。どの内容が良かったかについては（図12）、校内の先生方の「教師になったきっかけなどのエピソード」が最も多く、今後読んでみたい内容では（図13）、「愛着障がいについて」「応用行動分析」などが多かった。

表14 令和5年度 みやざき中央支援学校 研究通信月別内容一覧

月	主にアに関する内容	主にイに関する内容
8	今年度の研究について	校長 松田律子先生 「子供たちの中にいつも答えがあった」
9	特集： 各教科等を合わせた指導の基本的事項	
10	特集：日常生活の指導	本校元校長 武富先生 「私と研究」
11	特集：生活単元学習	教頭 愛甲孝夫先生 「私が教師を目指した理由」
12	特集：作業学習	新城 美由紀先生 「特別支援教育における図工美術教育の役割 ～作品展示の意味～」
1	特集：生徒指導提要について	栗原 真輝先生 「子供たちとともに」
2	知的障がいのある児童生徒への 指導の基礎・基本	高野 知紀先生 「私が伝えたいこと」
3	校長 松田 律子先生 「教員としての幸せ」	

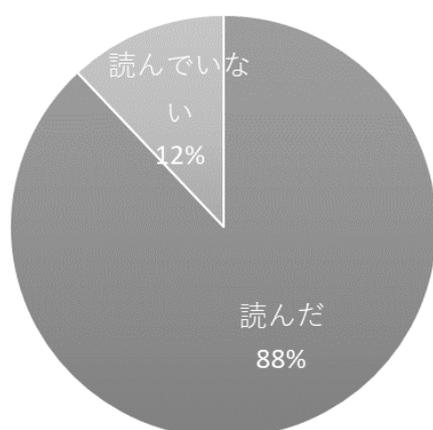


図10 アンケート結果（研究通信の閲覧の有無）

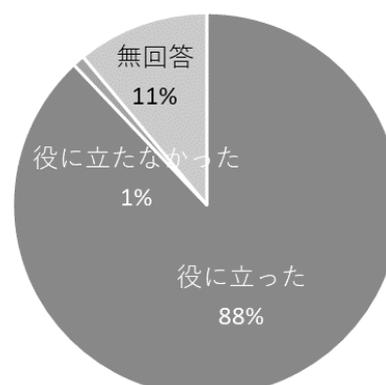


図11 アンケート結果（研究通信が自身の専門性の向上や児童生徒の指導・支援に役立ったか）

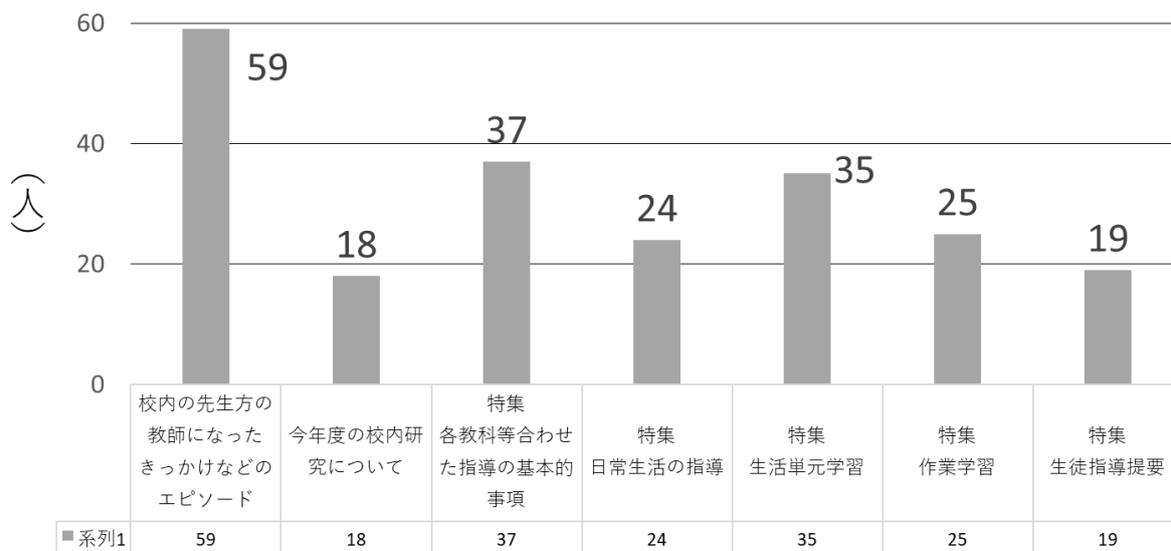


図 12 アンケート結果（良かった内容）

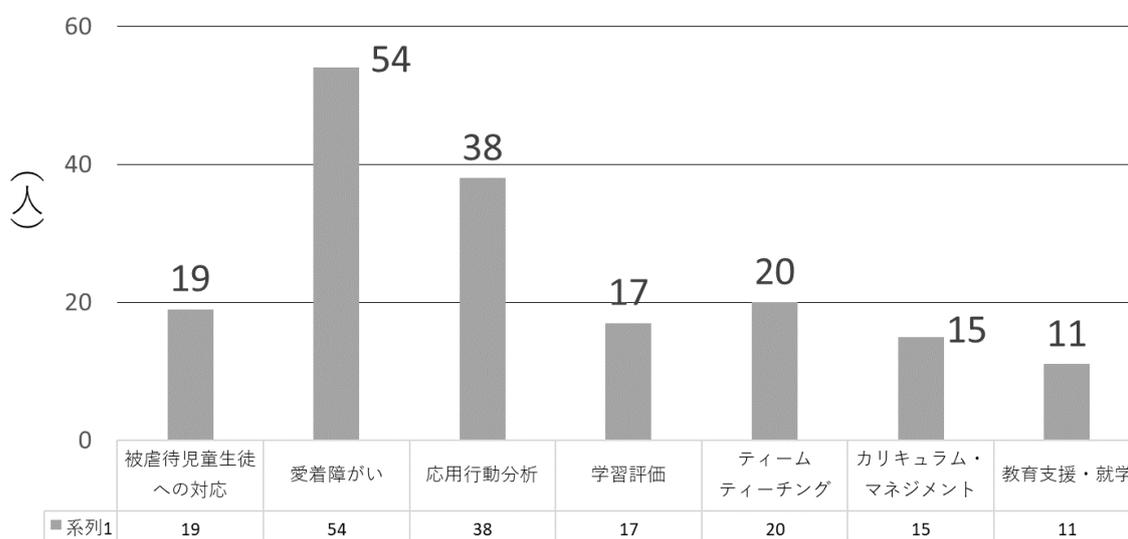


図 13 アンケート結果（読んでみたい内容）

（5） 相互授業参観について

今年度、校内研修の一環として、相互授業参観を予定していた。しかし、各学部との調整や時期、感染症流行による職員の補教体制の課題などがあり、実施することができなかった。次年度以降への実施に向けて行ったアンケート結果（図 14）では、約半数の職員が相互の授業参観を設定して欲しいと答えていた。それ以外の職員では「どちらともいえない」が約半数を占めていた。

「実施に向けてどのような案がありますか」という自由記述のアンケートでは、「配信や録画で視聴する」、「公開されている授業（初期研修、経過研修、指導教諭公開授業、合同授業等）と連動させる」、「参観週間を設ける」などの案があがった

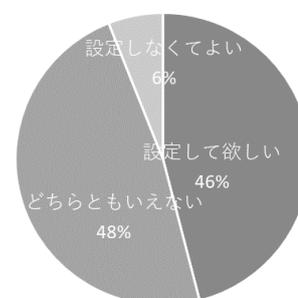


図 14 アンケート結果（相互参観授業を設定して欲しいかどうか）

Ⅲ 研究のまとめ

今年度は、学校の教育目標である「自立と社会参加を目指して、自ら学び、心豊かでたくましく生きる児童生徒の育成」を達成するため、「今と将来をよりよく生きる子どもの育成を目指す教育の在り方～子どもの学びを確実にするカリキュラム・マネジメントの検討～」を研究主題に設定し、本校の課題である年間指導計画の整理と検討について2ヵ年の計画のうちの1年目として研究を行った。

主な取組としては、校内研究では年間指導計画の整理や検討を行い、校内研修では特別支援教育（特に知的障がい教育）の専門性向上のための研修計画について検討を行った。

以下にそれぞれの取組についての詳細について述べる。

1 校内研究について

校内研究では、本校の課題である「学習指導要領に対応した年間指導計画の整理や検討」について、8つの研究班に分かれて課題解決に向けた取り組みを行ってきた。

その結果、それぞれの研究班において、本校の小学部から高等部までの12年間の学びの配列表が完成した（巻末資料①）。また、その作成過程において、足りない内容を検討したり、学ぶ内容を整理したり、精選したりするなど、各班で活発に協議が行われ、それぞれが課題意識をもって取り組むことができたと言える。さらに、各班での協議や検討を通して、「困っていることや悩んでいることが共有でき、つながりができたり、より強くなったりした。」、「授業についてのアイデアやアドバイスをもらうことができ、授業づくりにおいてもプラスに作用した。」、「特に各教科等を合わせた指導について、学習指導要領や様々な資料を振り返り、それぞれの教科等についての知識や理解が深まり、小・中・高それぞれの教育内容等について研究班のメンバーで共有することができた。」などの感想があり、授業づくりにおいても貴重な情報共有の場になったことが伺えた。授業について情報共有することができたことで、学部を越えて相互の授業を参観したいという要望も上がり、年間指導計画についての研究を行う際には、相互に授業を見合う機会の必要性も示唆された。

一方、次年度へ向けての課題として、①研究内容の引継ぎや年間指導計画の目標や内容の検討方法、②年間指導計画の活用や授業へのつながりをどのようにするか、③研究の担当職員や研究を行うことへの負担感をどう軽減するか、などが挙げられた。また、年間指導計画の書式の作成についても、引き続き、教務部と連携しながら検討を行い作成する必要がある。

2 校内研修について

校内研修では、「知的障がいのある児童生徒の指導や特別支援学校の学習指導要領などについて理解に差がある」という課題に対して、教育課程や教育活動の見直しに必要な基礎的・基本的な研修内容を検討したり、それぞれのステージでニーズに応じた研修を検討したりした。実際には、全体研修を4回、ニーズ研修を5回実施し、研究通信を8回発行した。NISE学びラボについては、研修時間として4回設定をし、それ以外の時間でもいつでも視聴できるようにした。

その結果、どの研修でも参加や視聴した職員の9割近くが、当該の研修について自身の専門性の向上や児童生徒の指導・支援に役に立ったと回答していた。また、ニーズ研修への参加は6割でNISE学びラボの活用も8割以上の職員が利用し、研究通信についても9割近くの職員が読んでいた。これらのことから今年度実施した4つの研修については、職員の専門性の向上に効果があったといえる。NISE学びラボの活用では、多くの職員の利用があったが、1人で17回視聴している職員や4時間近く視聴している職員もあり、視聴内容についても多様なものが含まれていることから、それぞれのニーズやスタイルに合わせて学びを促進するための効果的な方法であったと言える。また、ニーズ研修では、研修を受け

た職員の学びはもちろんのこと、講師の立場で研修に参加した職員からも新たな学びにつながったとの報告があった。このことから、職員同士の研修機会では、相互の学びにつながるということがわかった。さらに、研究通信については、「校内の先生方の教師になったきっかけなどのエピソード」が良かった内容として多く挙げられていた。以前は、通信で取り扱った内容については、普段の何気ないやり取りや職場外でのコミュニケーションなどで、知る機会が多くあった。しかし、近年、コロナ禍や働き方改革など、時代の流れとともに、職員間の日常の他愛ないやり取りの機会が減少している傾向がある。そのため、そういったことを知らずに職場だけで、仕事上でのやりとりだけに終わってしまうことが多い現状があると考えられる。今回のアンケート結果からは、多くの先生方がそういった内容について知りたいと思っていることを確認できた。その一つの方法として、紙面で伝えるという方法が活用できることが分かったので、次年度以降も継続して行っていく。併せて「愛着障がい」や「応用行動分析」などニーズが多かった内容についても、取扱っていく必要があると考える。今回、ニーズ研修や研究通信など人と人とのつながりを大事にした研修を中心に「それぞれが知りたいことを、気軽に、いつでも、主体的に学べる研修」目指して研修を計画した。これらの研修をきっかけに、職員同士の交流がさらに深まり、子どもたちの指導・支援における専門性が相乗効果的に向上することを期待したい。

一方、次年度に向けての課題として、相互授業参観と新転任者オリエンテーションの2点がある。

相互授業参観については、役半数の職員が必要と回答しており、残りほとんどの職員も「どちらともいえない」に回答していた。自由記述のアンケートでは、補教体制や授業時間等で制約が多く、相互授業参観の設定をしても実際に見に行けないのではないかという意見が挙がっていた。実施に向けて実現可能な方法について次年度、試行しながら検討をしていく。

新転任者オリエンテーションについては、様々な校務部において実施されているが、研究部としては、「知的障がいのある児童生徒の指導・支援の基礎」といったような内容で夏季休業中等時間が確保できる時期に検討していきたい

3 次年度の取組について

次年度は、継続して「今と将来をよりよく生きる子どもの育成を目指す教育の在り方～子どもの学びを確かにするカリキュラム・マネジメントの検討～」を研究主題として設定し、2カ年の研究の2年目を行う予定である。

具体的には、校内研究においては、まず、本校で活用する年間指導計画の書式を決める。その後、今年度と同様に8つの研究班（日常生活の指導、生活単元学習、国語科、算数・数学科、音楽科、保健体育科、図画工作・美術科、特別活動）に分かれ、12年間の学びの配列表と今年度の研究の課題を基に、学習指導要領に明記されている項目に沿って、各研究班で年間指導計画の検討と作成を行う。

それと並行して、校内研修においては、今年度に行った研修（全体研修、ニーズ研修、NISE 学びラボ、研究通信）の課題を改善しながら、継続して取り組みを行う。また、相互授業参観と新転任者オリエンテーションについては、今年度のアンケート等の反省を受けて検討を行いながら、実施していく予定である。

【引用・参考文献】

文部科学省（2018） 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編（幼稚部・小学部・中学部） 開隆堂